

レジャー時代の余暇教育

○ 久川 太郎 (流通経済大学)

余暇教育

I はじめに

我が国にも、レジャー時代が到来した。それは、労働時間の短縮、週休2日制・夏季一斉休暇等の普及による労働環境条件の改善、耐久消費財の普及による女性の家事労働からの解放、あるいは人々の余暇活動に対する欲求の高まりによるものであった。しかし急激な社会変動、産業文明の進展は価値感の変動を生じ、社会や個人に、余暇時代に対する準備をするひまを与えてくれなかった。現代の生活にみられるギャンブル、アルコール、スピード、短期集中型の旅行だけがレジャー時代の欲求を充足させるものではない。むしろ、こうしたものの異常なまでの普及こそが、レジャー時代に適応できなかった人間のノイローゼ現象とみるべきであろう。レジャー時代が到来した今こそ、私達は、今まで常に労働と対比して見られてきた余暇を新たな視点から見直し、レジャー時代に適応できる社会体制を整ねばならない。今回は、現在の我が国の余暇活動を分析し、その問題点を明らかにして、レジャー時代に適応するため社会体制等の整備、さらに余暇教育の必要性について述べたい。

II 我が国の余暇活動と問題点

我が国の現在の余暇活動は、「平日」「休日」「3日以上 of 長期の休暇」に区分されよう。まず平日の余暇活動では、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などの見聞き」、「何もしていないでのんびりする」など休養型、疲労回復型が圧倒的に多い。次に休日の余暇活動をみると平日と同様に「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などの見聞き」が一番多いが、「家族との団らん」「友人などとの交際」「軽い運動やスポーツ活動」「趣味・娯楽」「飲食・ショッピング」といった室内から戸外へあるいはより創造的な活動が多くなる傾向が見られる。さらに、3日以上 of 長期の休暇での余暇活動は「宿泊を伴った旅行」「日帰りの行楽」「ドライブ」など費用もかかる活動の占める割合が多くなっている。

このように我が国の余暇活動は余暇時間の増大と経済的ゆとりから欧米型に近づき一見望ましいように見えるが、それは表向きのことであり、本当のゆとりの中でのレジャーには程遠いと思われる。それはゴールデンウィーク等のすごし方を見ても言える。すなわち過密スケジュールによる駆け足のレジャーになりやすく、心身のリフレッシュにならないばかりか、事故につながつ恐れすらある。このように我が国のレジャーには①短期間中型であること②最近では旅行先でスポーツを楽しむ傾向があること③移動に車が利用されるため往復とも交通渋滞に疾れ、イライラを募らせると大事故につながる危険性があることが問題点としてあげられよう。さらに今後レジャーはますます大衆化し大型化してゆくと考えられるわけで、快適な余暇を過ごすための社会体制や施設の整備が重要であり、また学校や社会での余暇時代に適応するための余暇教育が急務となってくると考えられる。

III レジャー時代に対応した社会体制と施設の整備

今まで見てきたようにレジャー時代を迎えた我が国の余暇活動を更に充実したものにす

るためにはレジャー時代に対応した社会体制と施設の整備が必要である。余暇に対する考え方は入社後5年以内の人では「仕事は仕事、余暇は余暇」と考える人が多く、仕事優先の従来の見方とは顕著な差が認められる。また「休日にもっともしたいこと」では、ドライブ、ハイキング、旅行、参加するスポーツといった能動的な活動を求めている。若い人のみならず私達が余暇や自由時間をもっと楽しむために、労働時間の短縮、夏季等の長期休暇の普及、更に平日の休暇をとりやすくすることによって余暇施設を効果的に利用できるようにするなどが考えられる。これらにより日本特有といわれる短期集中型、また画一的なレジャー活動が、多様化・個性化してゆくとと思われる。さらに企業の厚生施設の充実を待つだけでなく安く良質な公共の宿泊施設の充実、スポーツ・文化センターの整備、身近な公園や公共施設の整備といった施設の整備があげられる。日本ではレジャー時代の到来といってもまだレジャーの時間や費用に余裕がなく表向きの華かさとは裏腹に、本当のゆとりの中でのレジャーには程遠い。これらレジャー時代に対応した社会体制と施設の整備によってゆとりのあるレジャーが可能となると考えられる。

IV 余暇教育

我が国の余暇活動は、ゴールデンウィークのすごし方を見ても解る通り、まだまだレジャーブームに踊らされた、アンバランスな余暇感覚が感じられる。今後ますます大衆化され、個性化する余暇活動に対応するためにはライフサイクルに合わせた余暇教育が急務となってくる。それは学校や公共機関等における趣味やスポーツを楽しむ能力の育成することである。高令化社会を迎える我が国は、学校教育の中でも心身のバランスのとれた発育を目指すとともに、余暇時代に対応する教育が必要となってきた。例えば小学校から大学に至るまで特に高校・大学では社会生活に適應するため従来の部活や正課の中に新たな種目加わることが望ましい。現在大学の体育実技の中に、ゴルフ、ボウリング、トレーニング、フィットネス（ジュギング）などの種目が実施され始めている。その数はまだ多くはないが、そこにはレジャー時代に対応しようとする姿がうかがえる。また学校教育のあらゆる場面でもレジャー時代に対応するための意識や考え方が学ばれるべきである。さらに学校だけでなく、地域活動の中でも趣味やスポーツを楽しむ能力を育成するために、各種の教室の開催、サークルの形成、余暇行事の実施、活動の場の提供といったことが必要になってくる。そしてこれらの活動が地域に定着した時に、余暇活動は、平日の活動も休養型から創造型へと移行してゆくと考えられる。

V 終わりに

我が国の余暇活動はレジャー時代到来といわれ表向きは華やかに見えるが、本当のゆとりの中でのレジャーには程遠い。また相変わらず悲惨な海、山の事故や交通事故が絶えない。それはレジャー時代に適應できなかった人々のノイローゼ現象であるとも考えられる。

私達は今後さらに大衆化され、個性化するレジャーに適應するために、レジャー時代に対応した社会体制と施設の整備が必要であり、さらに学校や公共機関における趣味やスポーツを楽しむ能力を育成し、余暇活動を創造的で個性豊かなものにするための余暇教育の充実が急務であると考えている。